

Theodore Sider, *Writing the Book of the World* (Oxford University Press, 2011, x+318p.)

西條 玲奈

分析哲学で何がどのように存在するかを論じる形而上学が隆盛して久しい。しかし、21世紀に入り、そもそも形而上学とはどのような学なのかを改めて反省する気運が高まっている。この動きはメタ存在論と呼ばれる分野として確立しつつある。本書はそうした時代の空気を多分に反映しつつ、20世紀後半の形而上学で登場した着想を踏まえた上で〈構造〉という新たな概念を駆使し、類似性、内在的性質、様相、時間といった多様な形而上学の主題を明晰な文体で論じた著作である。

著者の T. Sider は1993年に「自然性・内在性・複製」Naturalness, Intrinsicity, and Duplication でマサチューセッツ大学アムハースト校から哲学の学位を取得し、2001年には Oxford University Press から、体系的に持続の理論を展開した *Four-Dimensionalism* (邦訳『四次元主義の哲学』、中山康雄監訳、2007年、勁草書房) を発表するなど、現代の分析形而上学をリードする哲学者の一人である。

本書の内容は大きく二つに分けられる。第一に、(i) 本書の基礎概念である〈構造〉の内実を明らかにする箇所(1-2章、6-8

章)。〈構造〉は本書のメタ存在論の立場にも関わる重要な概念である。第二に、(ii) 〈構造〉概念を、自然法則、論理、時間、様相といった様々な概念に応用する箇所である(3-5章、9-12章)。

(i) に関連する内容を簡単に述べると、〈構造〉とは、実在のもっとも基礎的なあり方を表わす概念とされる(1章)。この〈構造〉は原始概念であり、他の概念から定義されない(2章)。さらに、〈構造〉は先行する類似の着想に比べ、言語表現との関連において独創性があることを述べた上で(6-7章)、現在のメタ存在論で提唱される他の概念との比較がなされている(8章)。

(ii) の〈構造〉の応用に関する箇所では、最初に〈構造〉と自然法則や帰納法など、本書の主題にとっては周辺的な概念との結びつきが述べられる(3章)。次いで、実質性、慣習、客観性といった哲学の論争に関わる概念との結びつきが言及される。こうした概念が哲学の論争に関わるのは、ある哲学的な主張や理論は内容をもったものになっているか、社会慣習に基づくものか、時代や地域の慣習から独立した客観的なものかどうか、を問うことができるからである(4章)。そして中でも、形而上学の身分を問うメタ存在論の主題に多くの紙幅が割かれている(5章、9章)点は特筆してよい。さらに、論理(10章)、時間(11章)、様相(12章)を扱う章では、〈構造〉に対応する基礎的な言語の中に、量子化や演算子は必要かどうか論じられている。

このように本書の主題は多岐に渡るが、その特徴として、形而上学に対する二つの態度が挙げられる。その一つは形而上学が人間のような知的存在者のもつ概念や言語についてではなく、世界の基礎的なあり方についての学だという態度である。もう一つは、存在論的問いを論じることと、それを論じる際に用いるべき言語を考慮することが明確に区別される態度である。これは理論の原始概念として何を選択すべきか、という問題につながる。W. V. O. Quine の用語法に倣い、ある理論が採用する原始概念のことを、本書では存在論 ontology に対してイデオロジー ideology と呼ばれる。

存在論とイデオロジーの区別に加えて、採用されるべきイデオロジーを検討することは本書の重要な主題である。『世界についての書物を著す』というタイトルは、<構造>という世界のあり方に関わり、しかもそれが言語表現との結びつきで論じられるという特徴がよく表現されたものといえよう。以下では、基礎的理論としての形而上学、およびイデオロジーの考察の重視という二つの観点を念頭に、本書の中心的な主題であるメタ存在論での著者の立場を紹介したい。

メタ存在論における著者の立場は、本文中で存在論的あるいは形而上学的實在論と呼ばれるものである。これは、形而上学が世界のあり方を扱う学であり、その論争は存在する事物のあり方に関わるという立場である。この立場と対置されるのが、E.

Hirsch の見解を念頭に定式化される存在論的デフレ主義である。存在論的デフレ主義によれば、形而上学上の対立は言葉の上のものにすぎず、実質的な衝突は生じていない。たとえばイスやテーブルといった対象の存在に関する論争を考えよう。常識的見解では、イス状に配列された粒子の集まりに加えてイスという対象も存在すると主張される。他方で、ニヒリズムと呼ばれる立場では、存在するのは微粒子のみでイスそのものは存在せず、それらがイス状に配列されていると主張される。だが、もしイスが存在しないとすれば、この店にはイスが 30 脚あるといった日常的な理解は誤りなのだろうか。存在論的デフレ主義によれば、イスの存在を主張する立場と否定する立場に対立はなく、ただ語り方が違うだけとされる。そのため「イスが存在するか」という問いは、イエスかノーか、客観的な答えのない疑似問題にすぎない。それに対して、存在論的實在論はこの論争に実質的な対立があると考ええる。著者はこの實在論を支持する議論を展開している。

存在論的實在論の立場を擁護するために、著者は対立する形而上学理論が採用する言語のうちいずれがより<構造>を反映しているかどうかで決着がつけられるという立場をとる。<構造>とは、大まかにいって實在の基礎的なあり方のことであった。そして存在論的實在論の立場では、たとえばイスが存在するかどうか、という存在論の問いには実質的な対立があるとみな

されていた。他方、存在論的デフレ主義では、「イスは存在するか」という問いは、常識的見解の言語では真に、ニヒリストの言語では偽に解釈されるのであり、一方の解釈が優越することはない。このようにデフレ主義を理解するなら、「イスが存在する」という文に真の値を割り当てる解釈をもつ言語L1と偽の値を割り当てる解釈をもつ言語L2のうち、どちらを採用すべきか決める基準があれば対抗できる。その基準となるのが、言語が〈構造〉を反映したものであるかどうか、というものである。より基礎的な世界のあり方を反映した言語が優先して採用されるべきだという基準があれば、L1とL2のいずれか一方が選ばれることになるだろう。こうして存在論の問いは実質的であることが確保され、この点で存在論的実在論の擁護に〈構造〉が結びつくのである。

それではそもそも〈構造〉とはどのような概念なのだろうか。〈構造〉は本文中でしばしば、実在を「分節に即して切り分ける」ものという隠喩で言い換えられ、世界のもっとも基礎的なレベルでのあり方と説明される。いささか厳密さを欠くが、たとえば、「緑」と「グルー」という二つの述語を比べたい。グルーとは N. Goodman が考案した性質であり、おおまかに言って、「時点 t より前は緑を、 t 以後は青を意味する」述語として定義される。「グルー」という述語は、緑と青という性質に訴えて人為的に作り出されたものである。「緑」

と「グルー」という二つの述語のうち、どちらが世界の分節を反映しているかといえ、ば、「緑」である。この時われわれには「緑」と「グルー」のいずれが世界のあり方を反映しているかを決定できないのではないかという疑問が生じるだろう。しかし世界がどのような〈構造〉をもち、どのような言語が〈構造〉を反映するかは、われわれがそれを判別できるかどうかに関わりなく決定されている、というのが著者の立場である。そのため述語「緑」が表わす性質はグルーよりも基礎的であり、〈構造〉に即していることは事実に関わる問題であって、それをどのように知ることができるかという問題とは別なのである。

以上のような〈構造〉という概念の特徴や独自性は、先行する着想と比較することでより明らかになる。本文中でも述べられる通り、〈構造〉は D. Lewis が提唱した自然的性質や D. M. Armstrong が具体的対象として主張したまばらな sparse 普遍者の役割に由来する。性質を表す述語の中には「ソクラテスの鼻であるかまたはエッフェル塔である」や「人間ではない」といった選言や否定を含むものもある。丸い、人間である、といった性質と異なり、こうした性質は、それを共有する対象に質的な類似性や、同じ因果的力を与えることはない。多数ある性質の中でも、対象の質的類似性や因果的力に貢献する「真正な」性質に対応するのが、自然的性質やまばらな普遍者である。特に Armstrong のまばらな普

遍者の影響の下で提案された Lewis の自然的性質の構想が与えたインパクトは、「実在の分節を切り分ける」という表現の採用や、構造を他の概念で定義されない未定義概念とみなす方針などから窺える。

著者の独創性は、彼らが真正な性質に対応するものとして導入した自然性や普遍者の発想を、述語の文法カテゴリーへの適用ととらえた点にある。著者は述語以外の、量子化や演算子、文結合子といった文法カテゴリーにも、〈構造〉を反映するかどうかという観点を持ち込む。特定の文法カテゴリーが〈構造〉を反映するとは、基礎的な世界のあり方を記述するのに必要だということである。たとえば量子化や結合子は単独で何かを表わすのではなく、文として成立してはじめて世界に成り立つ事実を表わす。言い換えると、何らかの事実を表わす「 $\exists xFx$ 」という文があったとき、「 \exists 」はそれ単独で何かを表わすのではないが、この文にとって不可欠の構成要素だというのが著者の言わんとするところである。このように、言語と実在の基礎的な構造との結びつきに焦点を定め、かつ量子化を始めとする多様な文法カテゴリーを射程におさめる点は、Lewis や Armstrong にはなかった特徴である。加えて述語以外の文法カテゴリーを扱うことは、〈構造〉が存在論よりもイデオロジーに関わるものだという点と関連する。〈構造〉を反映するかどうかという記述を演算子や結合子にも適用するのは、イデオロジーが述語だけで構成され

るのではないという著者の考えを反映する。たとえば存在論、時間や様相に関する問いでは述語ではなくむしろ存在量子化や時制演算子、様相演算子で表現されるものが事実を反映しているかどうか問われており、これらがイデオロジーに不可欠かどうかを検討することになるという。

このように、世界の基礎的なあり方を述べる用語として著者が言及するのは、もっぱら一階述語論理や集合論の言語である。なぜこれらの言語に、基礎的なものという特権的な地位を与えられるのか。その理由は、これらがさまざまな説明を行なう際に成功した理論であり、しかも不可欠なものだから、という Quine 流のものである。構造の実在性が主張されるのも、同様に、他の様々な概念を説明する際に有用だからというプラグマティックな理由とあってよい。ただし、何をもって集合論や一階述語論理が成功した理論とされるかは判然としない。筆者の想定を支持するにはより詳細な検討が必要である点は留意されるべきだろう。

以上で、メタ存在論における存在論的実在論との関連、およびイデオロジーの重視という二つの特徴を中心に本書を紹介してきた。本書は、総じて、形而上学が客観的な実在についての実質的な学であるとしたらそれはどのような場合なのか、という現代的な問題意識を背景に、形而上学の理論を展開する好例といえる。